

『セクシュアリティの歴史』における物語的転回

吉田直希

1

ミシェル・フーコー (Michel Foucault) は「物語」という視点から一つの歴史を書いている。

For a long time, the story goes, we supported a Victorian regime, and we continue to be dominated by it even today. Thus the image of the imperial prude is emblazoned on our restrained, mute, and hypocritical sexuality.¹

『セクシュアリティの歴史』 (*The History of Sexuality*) はこのようにはじまる。私たちはいま、自らが登場人物として描かれた物語を読んでいる。ハッピーエンドか、それとも悲しい結末か？

ところで、物語によって語られる歴史とはいかなるものなのか。冒頭から私たちはきわめて困難な問題に直面する。いかにして物語が歴史となるのか。私たちが物語を読むとき、それは同時になんらかの歴史を手にすることを意味するのか。あるいは、歴史それ自体を手にすることがそもそも不可能であるから、私たちは物語を読むのだろうか。もしそうであるなら、物語は現実にとどのような影響を与えているのか。

この本のどこを探しても物語の定義は書かれていない。歴史という概念に

¹ Michel Foucault, *The History of Sexuality, Volume I: An Introduction*, trans. Robert Hurley (New York: Vintage, 1978) 3.

しても同じである。歴史は物語ではじまり、物語によって歴史は語られるというフーコーの歴史＝物語観しか手がかりはない。ならば、まず、セクシュアリティについて語ることがなぜ物語的になるのかを考えてみよう。そして次に、セクシュアリティの歴史とはいかなるものなのかを明らかにしていこう。

さて、新歴史主義以降、私たちは歴史それ自体の定義を問題とせず、諸々のテキストを（歴史的に）分析しようとしてきた。今や歴史と文学の垣根はとりのぞかれているかのようだ。歴史の物語性を前提としてテキストを読むこと（と同時に書き換えること）、そこから新たな「歴史」をつくりだすことがこの批評理論の最大の特徴である。だから、彼らが扱うテキストには文学以外のさまざまな資料が含まれる。そしてそこには、当然フーコーの批評も含まれる。もちろん、新歴史主義がフーコーから生まれたなどと考えることはできないが、もし彼から何らかの影響を受けたと認めるのなら、そこに示される新たな「歴史」は、フーコーのテキストをそれぞれの立場から書き換えて示されたもう一つの物語であるといえるだろう。そして、数多くの批判にもかかわらず、新歴史主義批評による物語＝歴史が、今なお多くの人々を惹きつけている現状を考えると、批評の立場からも、物語としての「歴史」があらわす不思議な力についてもう一度検討してみる必要がありそうだ。²

² 新歴史主義批評とフーコーの関係についてはこれまで多くの研究がなされているが、とくに富山太佳夫編『現代批評のプラクティス—2：ニューヒストリシズム』（研究社出版、1995）3-24を参照されたい。彼はその中で、「フーコーの理論に依拠したとされるこの新しい批評は、あるところでそれから離れることによって、その外部を確立したということである」（21）と指摘し、新歴史主義がフーコーの権力論から一定の距離をおいている点に着目している。批評の立場（というものがすでに確立しているという条件付きではあるが）から、自らの実践を現実はどう位置付けるのかを私たちは真剣に考えるべきである。フーコーから離れる地点（「あるところ」）とはどこなのか、本稿はこの問題に対しても、何らかの解答を得ることを目的としている。なお、より大きな視点から理論と実践の新たな融合可能性を探る最近の研究として、川田潤「地政学的ユートピア—文学／歴史から文化へ」、箭川修、佐々木和貴、川田潤『新歴史主義からの逃走』（松柏社、2001）25-102を挙げておく。

以下の議論は、歴史の物語性を前提にテキストを書き換えることが、いかに力強く私たちに語りかけてくるのかを明らかにする試みである。そのために必要なフーコーへの転回。とはいえ、それは出発点への回帰ではない。単なる回帰は新たに何も生み出さないからだ。そうではなく、フーコーの物語があらわす特異な歴史性へと目を転じ、歴史の物語性を批判的に検討する、そのためにフーコーへと転回するのである。それは同時に、フーコーに対するさまざまな批判をも視野に入れた新たな物語論の構築を目指すものでもある。

2

『セクシュアリティの歴史』は「歴史」(history)と「物語」(story)の明確な区別を拒むかのような書き出しではじまっていた。「昔々」(Once upon a time)ではないが、「長い間」(For a long time)とは、なんとも非歴史的な書き出しではないか。また、セクシュアリティという概念について歴史的記述をはじめようという最初の段落で、どうして「物語は述べている」(the story goes)とあえて挿入しなければならなかったのか。私たちのセクシュアリティはいったいなぜこの物語を必要としているのか。

おそらく、冒頭で示した物語が終わる箇所を確定できれば、その後につづく(物語的でない)歴史記述との対比によって、物語へ言及した理由がわかるであろう。しかし、『セクシュアリティの歴史』の中で、この物語の結末を明示することはきわめて困難である。というのも、フーコーが歴史を語ろうとするとき、つまり物語の結末を明示しようとする瞬間に、自らの歴史的記述が物語の外にでられないことを語っているからである。この点をまず確認するために、フーコーが物語から歴史への移行をどのように示しているのかみておこう。

物語をしばし読みすすめていくと、押さえつけられていたセクシュアリティは全く別の姿を私たちに見せはじめる。いわゆる性の言説の爆発である。

フーコーは、物語をひとまずしめくくるにあたって、セクシュアリティの歴史が「増大しつづける抑圧の年代記」(the chronicle of an increasing repression) にほかならないと述べる。³ そして同時に彼は、この物語の根底に「抑圧的な仮説」(repressive hypothesis) があることを指摘し、あたかもこの仮説に真っ向から反対し、これから理論的に妥当な歴史記述を展開するかのような態度を表明する。フーコーが「性的な抑圧は本当に歴史的事実として確立したものなのか」(Is sexual repression truly an established historical fact?) と問いかけるとき、私たちは、物語から歴史への移行を読みとることができそうだ。⁴

しかし、この「物語から歴史への移行」はそう簡単には受け入れられない。というのも、新たな歴史が別の物語であること、つまり歴史から物語性を完全に消し去れないことを彼自身が認めているからである。これまで語られてきた物語が全くのつくりもの（歴史的に実証できない空想の所産）であるとフーコーが論証しているのなら、歴史への移行にも妥当性が認められよう。しかし、この物語は歴史的・事実にもとに（立てられた「抑圧的な仮説」を前提として）作られた物語だとフーコーは主張している。次の引用が示すように、彼は物語で語られている内容と全く正反対の歴史的事実を示そうとしているわけではない。

My purpose in introducing these three doubts is not merely to construct counterarguments that are symmetrical and contrary to those outlined above; it is not a matter of saying that sexuality, far from being repressed in capitalist and bourgeois societies, has on the

³ Foucault 5.

⁴ Foucault 10. フーコーにおける虚構 (fiction) と仮説 (hypothesis) の関係については、拙論 “Between ‘We’ and ‘Mankind’: Kant’s Enlightenment of Fictionality,” 『人文研究』第99輯 (2000) 191-218 を参照されたい。

contrary benefitted from a regime of unchanging liberty.⁵

フーコーは、「抑圧的な仮説」に対抗し、ここで「解放的な仮説」をもとにセクシュアリティの歴史を記述するとは言っていない。人々が性についてますます語るようになったことも事実である。だが、このことだけが歴史的な事実として認められる根拠はどこにもなく、その意味で抑圧的な物語を完全に否定することはできないわけだ。さらに、この「抑圧的な仮説」が単なる空想でないことを強調し、

Let there be no misunderstanding: I do not claim that sex has not been prohibited or barred or masked or misapprehended since the classical age; nor do I even assert that it has suffered these things any less from that period on than before.⁶

と付け加えている。このように、フーコー自身が「抑圧的な仮説」から導き出せる性の禁止や隠蔽をも事実として認めていることは忘れてはならない。

さて、これらの留保事項を考慮するなら、さきほどの「性的な抑圧は本当に歴史的事実として確立したものなのか」という疑問が、物語から歴史への移行を単純に示すものではないとわかるだろう。ようするに、これから述べる歴史にも物語性はあるわけで、歴史から物語を払拭することなど不可能なのだ。したがってまず、セクシュアリティの歴史が物語を必要とする理由は、物語と歴史が相互の前提になっているという点から説明できるだろう。

しかし、それでもなお、歴史への移行を目指そうとするとフーコーの面白さがある。彼はここで、物語／歴史の相互前提という構造にとらわれず、独自の歴史を記述しようと試みる。その歴史も一つの物語となるにちが

⁵ Foucault 10.

⁶ Foucault 12.

いない。しかし、それが前提のない物語として書かれるとしたならば、そこには従来の歴史＝物語にはみられなかった異質な歴史性が備わるはずだ。おそらく彼はこう考えたにちがいない。さて、この違和感を感じとるには、物語にすでに備わっている歴史性に固執してはならない。物語に変化を生み出す力を見つけ、いっきに歴史化することが必要である。まず、対立する二つの要素——物語と歴史、抑圧と解放、生と死など——のバランスを見極め、そこに力の微妙な変化を見てとろう。こうすることで、構造の安定性は一時的に忘却することができる。つまり、たとえわずかでも変化が認められるのなら、その変化に最大限の注意を払い、一つのエピソードから別のエピソードへと物語を展開させていくこと、それが物語から歴史への移行、すなわち物語の歴史化となるのだ。⁷

わずかな変化とは、たとえば、抑圧と解放のバランスを量ることによって感覚的に捉えられるだろう。すでにみた「抑圧的な仮説」にもとづく物語は、単に性が抑圧されていることを語っているのか。そうではなく、この仮説は、抑圧されているからこそ性について自由に語る事が大事なのだというように機能し、性の言説化＝解放を帰結として提示するものとなっている。フーコーによれば、私たちはここで、性について人々がますます関心をもって語るようになったという変化に着目するだけでよい。ここでは、変化の原因を抑圧にもとめる必然性はなく（もちろん物語の中に永遠にとどまるつもりならその必要は大いにあるのだが）、変化を変化として記述することが可能だと想定することがもとめられている。ところが、このような想定に失敗すると、物語が抑圧（原因）から解放（結果）へと向かっていることにしばられて、性をすでにあるものとして仮定してしまうだろう。この「前提としての性」

⁷ フーコーは、一見すると取るに足らない出来事をきわめて重要なものとして描いており、まさに「新歴史主義」的な記述がこの本の随所に見受けられる。たとえば、19世紀後半の歴史資料が伝える些細なセクシュアリティ (Village Sexuality) は物語 (story) として紹介されているが、この物語は同時に法的、医学的、理論的分析の対象として再構築され、後にみる生産的な権力の誕生を象徴的に表わす逸話となっている。Foucault 31 を参照のこと。

がもたらす直線的な関係に対して、フーコーは別の歴史的变化を描こうとしているのだ。⁸ それは、抑圧を原因とみなさずに、人々がますます多く語るようになったことを力の変化として描く試みである。彼は、次の引用に見られるように、性を前提としない移行、力の変質 (transformations) そのものを書くことを目指している。

In short, I would like to disengage my analysis from the privileges generally accorded the economy of scarcity and the principles of rarefaction, to search instead for instances of discursive production (which also administer silences, to be sure), of the production of power (which sometimes have the function of prohibiting), of the propagation of knowledge (which often cause mistaken beliefs or systematic misconceptions to circulate); I would like to write the history of these instances and their transformations.⁹

ここには、前提としての性が言説 (discourse) や力 (power) や知 (knowledge) に与える影響といったものは書かれていない。言説の生産、力の生産、そして知の増殖の場とその変化があるだけだ。まるで性について語らずにセクシュアリティの歴史が書けるかのような錯覚をフーコーはつくりだしてい

⁸ 「前提としての性」は、告白の伝統との比較からも説明されている。Foucault 65-67 を参照のこと。フーコーは、“the principle of sex as a ‘cause of any and everything’ was the theoretical underside of a confession that had to be thorough, meticulous, and constant, and at the same time operate within a scientific type of practice” (65-66) と述べ、宗教的な真理と科学的な「知への意思」(will to knowledge) の重層構造によって、性がすべての前提となる過程を論じている。もちろん、後にも見るように、フーコーはこれらすべてを言説他者の歴史 (history of discourses) として捉え直し、性—セクシュアリティの関係を成立させる歴史的变化に焦点をあてる。

⁹ Foucault 12.

る。¹⁰これがフーコーにとっての歴史である。「抑圧的な仮説」につづけて語られる歴史は、歴史的因果関係を前提としない歴史、つまり通常の歴史では不可能なことを可能に見せる「物語」となっている。

3

フーコーの歴史は、セクシュアリティの前提を否定し、力の変化を描く物語である。当然のことながら、「抑圧的な仮説」はフーコーにとって容認しうる理論とはなりえない。重要なのは、あくまで変化の過程であって、前提が歴史＝理論を導きだすことではない。つまり、性が前提として受け入れられる力の場を考えることの方が大切なのだ。したがって、逆説的ではあるが、フーコーの否定は前提となる性を完全に消去するものではない。何かに対してNoとはっきり態度を表明することは否定の一般的な形式である。だが、すでにみたように、フーコーは懐疑的な「？」によって二者択一的な否定を回避していたことを思い出そう。彼は、「抑圧的な仮説」があらわす歴史的因果律に対して疑問を投げかけているのであって、前提の構築性や言説としての性自体を否定しているわけではないのだ。たしかに、フーコーの懐疑的立場はある意味、不安定なものであるが、もはや後戻りはできない。したがって、次になすべきことは、「抑圧的な仮説」に対する反論ではなく、この仮説を生みだす力に焦点をあてることである。この視点の移動こそが、冒頭の物語から歴史への移行なのだが、フーコーはこの変化を、抑圧的な性から生産的なセクシュアリティへの移行として提示している。

では、「抑圧的な仮説」を生みだす力とはどのようなものなのか。ここで、ジュディス・バトラー(Judith Butler)の「性的な転回」(“Sexual Inversions”)

¹⁰前提のないセクシュアリティの歴史に対してフーコー自身が想定する反論については、Foucault 72-73 および 150-52 を参照されたい。なお、フーコーの自己批判とも読めるこれらの反論については、本稿とは別に取り上げるつもりである。

を参照し、セクシュアリティの歴史の核心部分に焦点をあてよう。¹¹ この論文は、フーコーのテキストを今日的視点から批判的に書き換えることを実践しており、きわめて重要なものである。私たちはここから、フーコーへの転回に必要な力の方向性を検討していく。

そのためにまず、フーコーが最終章「死の権利と生に対する力」(“Right of Death and Power over Life”) で描いている歴史的变化を要約しておこう。ここで彼は、歴史に対する生物学的な圧力が、何千年にもわたってきわめて強力であったと述べている。人類はつねに死の脅威に晒され、それは疫病と飢饉という形でわれわれに迫ってきた。ところが、18世紀に経済が飛躍的に発展し、人口増加を上回る勢いで生産性が向上したため、死の脅威は緩んでいく。疫病と飢饉がもたらす破壊的な死は、突然の再発生という例外を除いて (despite some renewed outbreaks), フランス革命以降は問題となくなかった。とはいえ、このことは、技術力の進歩に起因する出来事ではない。人間の生に対する関心の高まり、生の支配を目的とする知の形成が、死のもたらす差し迫った危険を避けることを可能にしたのだ、とフーコーは述べている。¹² 以上の点をふまえて、バトラーの解釈をみてみよう。彼女はフーコーの歴史、すなわち生と死の対立に認められる力の変化に注目する。

Foucault characterizes early modern Europe as governed by *juridical* power. As juridical, power operates negatively to impose limits, restrictions, and prohibitions. . . . Once the threat of death is ameliorated, as he claims it is in the eighteenth century, those juridical laws

¹¹ Judith Butler, “Sexual Inversions,” in *Feminist Interpretations of Michel Foucault*, ed. Susan J. Hekman (University Park: The Pennsylvania State UP, 1996) 59-75. バトラーはこの論文で、(1) AIDSという流行病の出現を前に、果たしてフーコーの歴史が有効か？ (2) 彼の描く性 (sex) がなぜこの作品では単数形で示されているのか？という二つの疑問を提示している。本稿では、このうちフーコーの歴史＝物語に関するバトラーの考察を主に取り上げている。

¹² ここでの要約は Foucault 141-42 を参照しておこなった。

are transformed into instances of *productive* power, in which power effectively generates objects to control, in which power elaborates all sorts of objects and identities that guarantee the augmentation of regulatory scientific regimes.¹³

「法的な権力」(juridical power)から「生産的な権力」(productive power)への移行(18世紀を境とする歴史的变化)が、フーコーのセクシュアリティを理解するうえで重要であることは明らかだ。すでにみたように、言説の生産、力の生産、そして知の増殖の場とその変化を描くことが、彼の歴史の主要な目的であり、この変化を示唆する「生産的な権力」の誕生は、まさに「抑圧的な仮説」なしで、セクシュアリティの歴史を描く重要な契機と考えられるからである。ここで、18世紀以前の「法的な権力」に「抑圧的な」側面をみてとることはたやすいが、法律=抑圧という図式をもとに議論をすすめてはならない。私たちは、いかにして性が前提として仮定されるようになったのかを検討しているのであるから、この場合、「生産的な権力」が抑圧と解放を、そして前提としての性を生みだす点を強調すべきだろう。つまり、力の変化によって対立する二つの歴史的事実が同時に説明できる前提(性)が成立する過程を読みとらなければならない。前提としての性は、権力が死から生へとその力の作用点を移動してはじめて私たちの前に姿をあらわす。

The category of “sex” is constructed as an “object” of study and control, which assists in the elaboration and justification of productive power regimes. It is as if once the threat of death is overcome, power turns its idle attention to the construction of objects to control. Or, rather, power exerts and articulates its control through the formation and proliferation of objects that concern the continuation

¹³ Butler 60.

of life.¹⁴

「『性』というカテゴリー」、いいかえれば前提としての性は、生と死をめぐる力のバランスが変化した結果として作られた概念である。たしかに、性は、「生産的な権力制度を作り上げ、正当化する支点（前提）である」（which assists in the elaboration and justification of productive power regimes）のだが、第一文の前半に書かれているように、そもそも、生をめぐる「研究と支配の対象として構築された」（is constructed as an “object” of study and control）結果として提示される一つのカテゴリーであったのだ。ようするに、性は私たちにとって疑いようのない真理などではなく、権力の変化によって生み出された結果にすぎない。ただ、この産物は権力の生産性を促すように機能するために、長期にわたって前提として考えられてきたというわけだ。こうして、抑圧から解放への直線的因果律は、歴史的事実（人々が性を抑圧しつつ同時に性について多くを語っていたこと）を導く仮説として受け入れられるようになる。このように、生をめぐる力の変化に焦点をあてることにより、性の物語性（構築性）が明らかになる。

フーコーの懐疑的「？」は前提を完全に否定するのではなく、前提の構築を可能とする力の場合を想定することを要求していた。そして、すでにみたように、この想定にもとづく歴史とは、対立する二つの要素——ここでは生と死——のバランスを見極め、そこに見いだせる力の変化を描き出すことにほかならない。私たちは、死から生への変化（「法的な権力」から「生産的な権力」への移行）に視点をずらし、前提としての性が作りだされる過程を辿ってきたわけだ。もはや、抑圧から解放へという図式は前提（性）から崩れている。いまや私たちにもとめられていることは、フーコーの歴史をどのように解釈するか、つまり、この新たな歴史＝物語をどう書き換えるかというこ

¹⁴ Butler 60.

とであろう。その意味で、次に示すバトラーの疑問はきわめて重要である。

If we accept the historically problematic character of this narration, can we accept it on logical grounds? Can one even defend against death without also promoting a certain version of life? Does juridical power in this way entail productive power as its logical correlate? ... Does it make sense, then, to reject the notion that life entered into history as death took its exit from history?¹⁵

バトラーの懐疑的「？」はこのように示されている。たしかに、フーコーは、性が前提として構築されていること、つまり性の物語性を独自の視点から歴史的に分析している。しかし、フーコーの歴史もまたもう一つの物語ではないか。性の代わりにここでは、「生産的な権力」がもう一つの前提として機能し、冒頭の物語を含めて、あらゆる性の言説化を統轄しているのではないか。それは、権力がもはや死を相手に格闘する必要がなくなったことによって説明されているが、生の支配を目的とする権力＝知の誕生は本当に死を完全に回避しているのか。ようするに、彼女はこれらの疑問によって問いかけているのである。変化を変化として描く際に必要だった相互前提の忘却は、もう一度、歴史化される必要があるのではないかと。

生あるものは死を避けることはできない。権力がそもそも死をその限界としていた理由はおそらくここにある。ならば「生産的な権力」もまた、限界としての死を超えることはできないのではないか。大事なのは、フーコーの歴史から表面的には姿を消している死が「生産的な権力」によって生み出されていることを思い出すこと、つまり「生——セクシュアリティ——性」の枠組みの中で、死の言説化も同時に進行していることを、この物語から読み

¹⁵ Butler 63.

とることである。¹⁶ 死は避けて通れない、とはいえ、彼女は「死に対抗して」(against death)生きることが不可能だと述べているわけではない。私たちは現実に防御しうるし、死を相手に自らを守ることがまさに生きるということであるのだが、その場合、つねに「ある特定の生のあり方を推し進めて」(promoting a certain version of life) いることを認識しなくてはならないのだ。したがって、バトラーによるフーコー批判は、「生産的な権力」が前提であること自体を否定しているわけではなく、この新たな前提が作り出される過程を辿る（歴史化する）ことを目的としている。その意味でフーコーの生に対する願望は重要なのであって、私たちはここで「抑圧的な仮説」を再度もちだし、死から生への移行に No とってはならない。¹⁷

4

では、生みだす力はいかにして新たな前提となるのか。バトラーはここで、フーコーの歴史に力の「転回」(inversion)を読みとろうとする。と同時に、この「転回」の力によって新たな歴史を生みだしていこうとする。その歴史は、まるでフーコーが語るもう一つの物語であるかのように描かれている。

Here we can locate a shift or inversion at the center of power, in the

¹⁶ バトラーは権力の限界としての死について、“Death is the limit to power, he argued, but there is something that he missed here, namely, that in the maintenance of death and of the dying, power is still at work and that death is and has its own discursive industry” (71) と述べている。

¹⁷ フーコーの生に対する願望について、バトラーは、“It appears that Foucault wants to make a historical shift from a notion of politics and history that is always threatened by death, and guided by the aim of negotiating that threat, to a politics that can to some extent presume the continuation of life and, hence, direct its attention to the regulation, control, and cultivation of life” (62-63) と述べている。ここで彼女は、フーコーの生—政治 (bio-politics) に歴史が欠落している点に着目し、新たな歴史の必要性を主張している。

very structure of power: what appears at first to be a law that imposes itself upon “sex” as a ready-made object, a juridical view of power as constraint or external control, turns out to be—all along—performing a fully different ruse of power; silently, it is already productive power, forming the very object that will be suitable for control and then, in an act that effectively disavows that production, claiming to discover that “sex” outside of power. Hence the category of “sex” will be precisely what power produces in order to have an object of control.¹⁸

注目すべきなのは“shift or inversion”という表現である。どの単語も変化をあらわす際に用いられるが，“shift”はある場所から別の場所への移動を、そして“inversion”は反転や転倒のように反対方向への動きを一般に意味する。バトラーは「法的な権力」から「生産的な権力」への変化を提示するとき，“shift”という語を使っていた。私たちは、まさに力をその変化(shift)のうちに読みすすめ、前提としての性が結果となる過程を辿ってきたのだ。ところがここで、バトラーは“shift”を“inversion”と書き換え、力の構造(法的／生産的の相互前提)の内に「転回」という新たな変化を提示している。

この書き換えによって、「生産的な権力」と死の言説化の関係が明らかになることはいうまでもない。まず、冒頭の物語で確認したように、「抑圧的な仮説」では、性が前提としてすでに存在しており(ready-made object)、法も権力も外側から、力を行使すべき対象であるこの性に制約を与えていた。大事なはその次の段階で、というよりは、最初から「法的な権力」が生産的であったという指摘である。「法的な権力」は将来において支配することになる対象(=性)を形成し、形成しつつ、自らはその生産に関与したことを認

¹⁸ Butler 64-65.

めないという策略(ruse)をとる。そしてこの権力は、のちに全く無関係な対象を発見したかのように主張する。つまりフーコーの「法的な権力」(それは死に対抗する力であった)は制御に適した(suitable for control)対象を生みだす力を発揮したのであって、だからこそ、ある特定の生を推し進めることができたのである。この場合、「法的な権力」(=「生産的な権力」)は、別の生をも同時に生み出している。ただし、それは暗黙のうちに(silently)対象外として規定される生であって、死を運命づけられる生なのだ。したがって、「生産的な権力」はこれ以降、死をつねに産出しつづける。つまり、現代の死は、力の転回によってつねに言説化されているのである。このように書き換えられるフーコーのテキストは私たちに新たな歴史を提示している。

実は、バトラーの新しい歴史は、ちょっとした力の変化によって生みだされている。ここで用いられる“or”もまた一つの変化をあらわす語であり、これによってフーコーの権力論はいっきに歴史化されているといえるだろう。ようするに、私たちが辿ってきた力の変化は、一つのversionから全く別のversionへの移動(shift)ではなく、力の内部(in)におけるversionの反転として書き換えられるものであり、その意味でバトラーはフーコーの歴史に「転回」(inversion)をもたらしている。と同時に、彼女は物語としての『セクシュアリティの歴史』を歴史へと変化させているのだ。

したがって、転回とは、このように力を変化として捉える試みにほかならない。しかし、自らを支点として自らに向う力は、本来私たちには量り知ることのできないものであろう。フーコーにおいて、そしてバトラーにとっても、私たちが力を生みだすことはなく、私たちは力によって(ある特定の)生を与えられているだけだ。それでも(いや、だからこそ)力の動きを語る場を想定することは重要である。なぜなら、力の変化を語ることによって私たちは、自らの生が純粋な生ではないことを実感として理解できるからである。もし、力の生みだすさまざまな力を考慮せずに生きることができるとしても、それがきわめて特殊な生き方であることに変わりはない。ここで、この「転回」が一回限りの運動でない点を強調しておきたい。バトラーによる

フーコーの歴史化は、力の同時性を明らかにするものであるが、この同時性は変化 (shift) を前提としてはじめて理解できるものである。“shift” から “inversion” への変化はフーコーへの批判という形で展開されながらも、結果としてフーコーの力をさらに強めている点にバトラーの歴史の面白さがあるのだ。ならば、彼女の書き換えによる変化は、やがて別の変化によって書き換えられること、つまり、さらに歴史化されることを否定するものではないだろう。内部で作用する力はずねに外部にある力の存在 (の可能性) を同時にあらわすのであって、力が自らを帳消しにすることはなく、さらに転回を促すものであることを忘れてはならない。結局、バトラーはフーコーときわめて近いところで全く新しい生と死の可能性を探っていたのだ。

最後に、『セクシュアリティの歴史』の結末をみておこう。とはいえ、バトラーの批判が明らかにしているように、この物語に本当の結末はない。彼女による書き換えがフーコーの物語を変化させている現在、私たちは生みだす力のさらなる転回によってしか、結末を思い描くことができないからだ。繰り返し述べるが、力の変化を想定することは重要である。そこで、そのための手がかりを探るため、フーコーにとっての生 (それはセクシュアリティを想定する力の効果である) の物語性を再確認し、本稿をひとまずしめくろう。

フーコーにとって生きるとは、「生産的な権力」の誕生を語ることにほかならないが、そこにあらわれる性は、不可解な力を持っていた。この性は歴史的因果律を無効化しつつ、同時に歴史にとって不可欠な前提として自らを定義することができる。

In 1976 Foucault sought to disjoin the category of sex from the struggle against death; in this way he sought, it seems, to make of sex a life-affirming and perpetuating activity. Even as an effect of power, “sex” is precisely that which is said to reproduce itself,

augment and intensify itself, and pervade mundane life.¹⁹

このように、フーコーにとっての「性」(“sex”)は「生を肯定する永続的な行為」(life-affirming and perpetuating activity)として死から切り離される。私たちは、ここでバトラーとは異なる、死に対する (against death) 一つの明確な態度——生き方——を確認しておこう。フーコーの性になぜ死がないのか。それは、この性が外部をもたない自己再生産 (reproduce itself) をモデルとするものだからである。このように定義される性は、外からの影響を受けて変化する (老化したり破壊されたりする) ことがなく、死を完全に回避することができる。ここでは、自らの生を生きることしかおこりえない。²⁰ このように、「生産的な権力」を純粋に実現する性を想定することが、フーコーにとって死を相手にする (まったく相手にしない) 態度となっている。この性をフーコーが実践していたのかどうかは問題ではないだろう。それはおそらく現実には不可能なはずだ。問題なのは、「前提であったはずの生産的な権力」が自己再生産的な性によって、前提として機能していないこと、と同時に「生産的な権力」が性の自らを生みだす運動＝歴史においてつねに不可欠な力として前提になっていること、この二つの矛盾する要素がこの性に備わっている点が重要なのである。したがって、性に対して Yes といっても、No といっても、いずれの場合も矛盾を認めることにしかならず、その意味で力に対する肯定も否定もありえないわけだ。さらにバトラーは次のように主張していた。

He warned us, wisely, that “we must not think that by saying yes to sex, one says no to power; on the contrary, one tracks along the

¹⁹ Butler 72.

²⁰ 生物学的視点をふまえ、フーコーの生—政治学について興味深い論を展開しているものとしては、田崎英明『思考のフロンティア：ジェンダー／セクシュアリティ』(岩波書店、2000) 29-60 が挙げられる。

course laid out by the general deployment of sexuality. It is the agency of sex that we must break away from.” And that is right, for sex does not cause AIDS. . . . One ought not to think that by saying yes to power, one says no to death, for death can be not the limit of power but its very aim.²¹

フーコー自身が自らの願望を肯定し (saying yes) ていないことは明らかである。彼が二者択一的な選択を望んでいないことは忘れてはならない。また、フーコーに対して No ということは、バトラーがここで望んでいることではない。私たちは、バトラーが「死が権力の限界ではなく、まさにその目的である」と述べている点に注目し、生みだす力の歴史的過程を読みとらなければならない。それはまさに、フーコーがセクシュアリティの歴史的痕跡を辿ったように、「生産的な権力」から／に力を語ることである。私たちはこの物語を歴史化するために今ここで転回しようとしているのだ。不可解な生 — セクシュアリティ — 性の物語はここからはじまる。

²¹ Butler 72.